

## 山形県「食」と「農」に関する教育実践活動

学校名	東根市立東根小学校	校長名	工藤 俊夫
所在地	〒999-3701	TEL	0237-42-1200
	山形県東根市大字東根甲1912番地	FAX	0237-42-1201
担当教諭名	青沼 敦子	e-mail	Keyaki-1@yacht.ocn.ne.jp
取組分野	<input checked="" type="checkbox"/> 農業・農村体験学習などを通じた「食」と「農」に関する教育活動 <input type="checkbox"/> 学校給食等を通じた「食」と「農」に関する教育活動		
取組内容	<p>(1) 活動のテーマ(ねらい)</p> <p style="text-align: center;">～日本一の大けやきのもとで～ 地域に根ざした稲作体験学習と稲藁を通じた文化の伝承活動</p> <p>(2) 平成16年度 第5学年 76名</p> <p>(3) 開始年度 平成8年</p> <p>(4) 活動の動機</p> <p>東根小学校の玄関前敷地には、国の特別天然記念物「日本一の大けやき」が聳え、子どもたちを日々温かく見守っている。地域の方々が「日本一の大けやき。横綱ならばそれにふさわしい大横綱を作ろう。」と立ち上がったのは、平成6年のことであった。</p> <p>もともと昔から稲作や果樹を中心とした農業の盛んな東根地区では、その農産物である稲藁を使った伝統工芸品が多く作られており、その技術を生かした大綱を地域のシンボルである「大けやき」に掲げることで地域活性化を図ろうとしたのである。初年度は、地域の方々が横綱の試作を行い、大けやきを飾った。翌年、横綱を引いて地域を回るパレードが始まる。そして、平成8年度には、「東根の未来を背負う子どもたちに大切な大けやきと伝統を伝えよう」という地域の熱い思いから、本校の6年生(170名)も学年活動として参加し、横綱作りに挑戦した。</p> <p>平成9年度からは、稲藁を使い、綱を作る伝統工芸の体験学習に加え、児童自らが、田植え・稲刈り・収穫祭と一連の米作りの体験学習に取り組み、年間を通して、稲作や稲作文化についての学習に取り組むようになった。なお、これらの体験学習は、社会科の学習との関連で、平成14年度からは第5学年で取り組むようになった。</p> <p>(5) 活動の内容</p> <p>① 田植え(5月下旬)</p> <p>東根第一中学校の北側の水田(大けやき横綱づくり委員会メンバー所有)をお借りして実施している。実行委員の方が木杵を使っての碁盤の目の跡に、親子で裸足で入り田植えを行う。初めての親子も多く、田植えの前に、大けやき横綱づくり実行委員会の農家の方が先生となり、苗づくり、田植えの方法、稲穂が実るまでの成長についての学習を行った。特に苗の持ち方や植え方を丁寧に教わった。初めは恐る恐る田に入るが、やがて足りない苗を投げたり、転んで泥んこになったりしているうちに、面白くて止められなくなる子が多い。近くの堰(小川)で足を洗う心地良さも体験する。</p> <p>その後、学年の母さん方のおにぎりをおにぎりをいただく。毎年、おにぎりの具は、紫蘇(ゆかり)ときな粉と決められている。特にきな粉のおにぎりは近頃あまり食べる機会がなくなってきているが、五穀として大事にされてきた稲と豆の組み合わせで、昔から田植えの「ごっつおう(ご馳走)」として「食」されてきたものである。その体験も合わせ、皆で楽しく語りながら、車座になっていただく。今年は、保護者から取れ立ての筍汁と漬物まで差し入れられ、心に残る一日であった。</p> <p>昔ながらの田植えによる田植え作業や食事を通して、伝統的な稲作の学習、食文化の学習を行った。</p>		

② 稲刈り・収穫祭（9月下旬）

稲刈り鎌を持っての手刈りを体験する。田植え作業の時と同じように、稲刈の前に、大けやき横綱づくり実行委員会の農家の方が先生となり、稲の刈り方、束ね方、杭がけの仕方、稲の乾燥方法などについての学習を行った。実際は刈り方よりも束ねることが難しく、四苦八苦しなながら稲刈体験をし、稲の収穫を喜ぶ。今年は、台風一過の青空の中、どろどろの田に長靴で入り、一束一束汚れないように畔まで運び、手間をかけての体験だった。

稲刈りが終了した後でまた、伝統的な食文化、餅つきを行う。初めて杵と臼で餅をつく子も多い。毎年、全員が積極的に杵を持ち、餅つきを体験する。つきたての餅をあんこ、納豆、お雑煮などにしてご馳走になる。

刈上げ餅の意味について実行委員会の方から学ぶ時間もある。お祝い事であることや栄養面などから必ず小豆を用いることも学んだ。あんこ餅を食べる由来である。伝統的な食文化の生きた継承であった。

③ 横綱づくり（2月下旬）

2月上旬より当日までに「大けやき横綱づくり実行委員会」が中心となり、稲刈り・乾燥してきた稲藁を、藁すごき・筵編・垂れつくりの準備を整えておく。

当日は、児童や保護者も参加し、自分の身長分の縄ないの後に、芯入れ及び芯づくり・3本ねじり・飾りつけを行う。縄ないは熟練の委員会の方が、初心者の児童や保護者に丁寧に教えてくれ、約半日かけて約250キロの大横綱が完成する。体育館の2階ギャラリ一部分に設置し、終了となる。

④ 大けやき横綱パレード（4月29日）

2月に完成した横綱を体育館から下ろし、それを引いて市内を大勢の児童や子どもクラブ、実行委員会などでパレードする。最後に大けやき前に横綱を設置する。今では、春先恒例のお祭りとなり、地域を挙げて楽しみにしている行事である。

⑤ 案山子作りや藁を使ったしめ飾り作りなどの学年・学級活動

実行委員会とは別に、学校や保護者主体の活動も行われている。毎年、決められている活動ではなく、該当学年の創意工夫が生かされている。

平成14年・・・祖父母参観にてしめ飾りづくり。東根公民館より地域の方の講師2名を紹介していただき、児童と祖父母と一緒にしめ飾りづくりを体験した。11月の行事であったが、どの家庭でも12月末から新年まで玄関先に飾り、福を招くことができた。初めて作る祖父母も多かったが、昔取った杵柄か、縄ないなどの見事な手さばきに、孫である児童たちから盛んな拍手をもらい、大変満足していただいた。さらに、おにぎり昼食と称し、祖父母から昔のお話をお聞きしながら昼食会を行ったところ、普段お家では聞くことのできない内容をお聞きすることができ、大変好評であった。

平成16年・・・今年度は、該当5年生の保護者母の会「スーパー母ちゃんの会」が田に立てかける案山子づくりに挑戦した。1～3組までのお母さん方が子どもたちと一緒に2日間公民館に集まり、思い思いの材料を持ち寄り、各組1体ずつ作成した。1組は担任、2組はアテネオリンピック金メダルの谷亮子さん、3組は話題の映画の主人公忍者ハットリ君の案山子を完成させた。案山子の中には、もちろん藁を使用した。また、完成数日後に行われた秋季運動会で全校生と保護者に披露され、その翌日には田に飾られた。その後、大型の台風が来形したが、その度に母ちゃんたちが案山子を自宅に避難させ、大切にしてきたという。

(6) 実施体制

大けやき会議の所属団体「大けやき横綱づくり実行委員会」とその年の東根小学校担当学年（平成8年～12年までは6年生，13年は5・6年生，14年からは5年生）が計画から実施まで協力して行う。実行委員会は，農作業から横綱作りまで指導，準備，支援を行い，学年の親の全面的な協力のもと，児童が毎年貴重な活動を体験している。

(7) 工夫した点・苦勞した点

- ① 地域の方々に呼びかけ，実行委員会を組織した点が，一番の苦勞であったと，東根公民館の佐藤豊館長さんは語る。実際に横綱づくりの作業を行うのは大変な事業である。農家の方や区長さんに呼びかけ，徐々に協力してくださる方を増やし，お願いしていったという。また，どんな横綱を作るのか，藁はどうするのか何度も検討し，出雲大社まで視察に出かけたという。
- ② 次に苦勞なことは学校との連携である。稲藁の文化を子どもを通して引き継いでいきたいという思い，大けやきを中心に東根の発展を願っている地域の思い，そして，日本いや東根を支えてきた稲作を子どもたちに実際に体験させたい学校側や保護者の思いが重なり，今も継承される大事な行事となっている。

学校では，稲作の体験学習と5年の社会の学習（農業についての学習）を組み合わせることにより，さらに稲作の学習が深められるよう積極的に取り組むようになってきた。

(8) 協力を得た機関・個人

- ・ 大けやき横綱づくり実行委員会
- ・ 東根公民館
- ・ 育成会役員

(9) その他（地域との交流）

この行事は，ほとんど全てが地域との交流で行われるものである。地域が子どもを育て，子どもの活躍が地域力・教育力を育てる。大けやきを中心としたすばらしいふるさと創生の事業であると考ええる。

子どもたちの反応（資料：学年便り，学校文集のコピーなど）

- ・ 現在，保護者の職業の中に農業という文字がほとんど消えてしまった。祖父母が農業の中心となり，児童も田畑での手伝いを行うことがなくなってしまった。そんな中での初めての田植えには，どの子も戦々恐々，裸足で田に入ることに抵抗も大きかった。しかし，一度入ってしまうと，足の心地良さ，自分で植えた跡の達成感，そうした喜びでいつまでも田から去ろうとしない姿が合った。稲刈りもそうであった。鎌を持つことに対して，抵抗のあった児童も深く腰をかがめ，いつまでも切っている。米作りのすばらしさに打たれ，ご飯嫌いだった子が，大好きになったという実話もある。毎年，この体験活動は，子どもたちの心を揺さぶり，変えている。

取組の効果

- ・ 農業を中心にして発展してきた本地域の歴史への畏敬と稲作への愛情を，児童に感じとらせることができた。
- ・ 地域の人々と児童の交流を通して，温かく広い地域の教育力が児童の成長を豊かに育んでいる。また，地域の文化が児童に確かに継承されている。

今後の課題

- ・ 総合的な時間を活用し，さらに児童の主体的な関わりの時間を確保することで，自分たちを支える農業と食に対する確かな目を育てていきたい。